

梵鐘……お寺で見かける大きな釣鐘のことですが、平素の暮らしでは盂蘭盆会の精霊迎えか、あるいは除夜の鐘くらいしか、馴染みが無くなったかも知れませんね。お寺にとっては必需品に他ならず、大切な仏事に必要な時を告げるために用いられています。本来は時報という実用目的であった梵鐘が、お寺の象徴のような存在にまでなった理由は、やはりその響きにあるのではないのでしょうか。低く、重く、空気が揺れる音です。人により受け止め方は異なりますが、何とも言えず信仰心を呼び覚ますような趣きを感じられます。

有名なのは「**天下の三名鐘**」——勢いの東大寺、形の平等院、声の園城寺——と呼ばれるものや銘の神護寺(銘文は橋広相、銘は菅原是善、書を藤原敏行……三絶の名鐘とも呼ばれる)、さらに製造年(文武2・698)の入った鐘としては最古である妙心寺の梵鐘、といったものがあります。

ちなみに、「半鐘」というのは梵鐘の小型のものを指しますが、時代劇などでは火災発生の急を知らせる道具として登場しますね。余韻ではなく、高い音色をうまく活用したものです。

さて、こうした優れものがある一方、争いの原因ともなった梵鐘があります。それが豊臣秀吉ゆかりの**方広寺の梵鐘**でして、下表のように、かなり数奇な運命を辿っています。最初の造仏は銅製の予定を木製に変更したもので、高さ21m、何と東大寺大仏(16m)よりも大きかった。

回数	年 月 日	建造または損壊	素材・製法など
初回	文禄2年(1593)9月24日	秀吉、大仏殿の上棟	木製漆膠・金箔
	文禄5年(1596)閏7月13日	大地震で崩壊……銅製なら壊れなかったかも？	
2回目	慶長5年(1600)3月	秀頼によって再建	銅像
	慶長7年(1602)12月4日	失火がもつて焼亡	
3回目	慶長16年(1611)11月	秀頼によって再々建	唐銅で鑄造、黄金で鍍金
	寛文2年(1662)9月24日	大地震で崩壊 → 通貨(寛永通宝)に改鑄された。 ※銅銭の直径が1文……足袋や靴の文数の基準	
4回目	寛文4年(1664)3月または5月	復興	金漆の木像
	寛政10年(1798)7月1日	落雷により炎上	
5回目	天保14年(1843)	尾張の有志により再建	木像。旧像の1/10サイズ
	昭和48年(1973)3月27日	失火により焼亡。以降、大仏は再建されていない。	

この表自体は大仏殿に関してですが、これだけの被災が度重なりますと、単なる不運だけでは済まされない感じがしますね。秀吉をはじめとして豊臣家は何かに呪われているのでしょうか？秀吉は天下人になる過程で無慈悲な行いもしましたが、まるで天罰が下ったような有り様です。余談ながら、秀吉ゆかりの大坂城なのですが、これも数度の落雷に見舞われているのです。

さて梵鐘の方ではありますが、こちらは全く別の側面から、すこぶる人為的な災難に遭いました。慶長7年の火災で溶けてしまった大仏の再々建は、秀吉の遺児・秀頼によって進められましたが、完成なった大仏の開眼供養がようやく目前に迫った時点で、史上有名な事件が発生したのです。それが「**方広寺鐘銘事件**」(慶長19年・1614)と呼ばれているものです。

鐘銘……梵鐘の胴の部分に刻まれた文字や文章のことを指しますが、飛び抜けて有名なのが
 再建を目指した方広寺の梵鐘のそれであり、署名以外の本文は下に示した通りです。

洛陽東麓	舍那道場	聳室瓊殿	横虹画梁
参差万瓦	崔嵬長廊	玲瓏八面	焜燿十方
境象兜夜	刹甲支桑	新鐘高掛	高音永鏗
響応遠江	律中宮商	十八声縵	百八声忙
夜禅昼誦	夕灯農香	上界聞竺	遠寺知湘
東迎素月	西送斜陽	玉筍堀池	豊山降霜
告怪於漢	救苦於唐	靈異惟夥	功用無量
所庶幾者	国家安康	西海施化	万歳伝芳
君臣豊楽	子孫殷昌	仏門柱礎	法社金湯

大意としては、「遠い天竺や、あるいは中国からもたらされた仏の教えというものに感謝をし、その功德によって世の中が安泰で、人々が子々孫々、平和に暮らせますように。」との願いです。この梵鐘は慶長19年8月3日の大仏開眼供養に合わせて製作されたのですが、ご存知の通り、「国家安康」と「君臣豊楽」の文言が問題になったのです。つまり、家康の文字を胴切り(=中央から二つに切る)にした上、豊臣家の繁栄を願う内容であって、これは家康(徳川幕府)に対する呪いが込められている、との難癖が付けられたのです。時間を追って推移を見てみますと――

- 慶長 19 年 4 月 16 日 東福寺僧・^{ぶんえいせいかん}文英清韓が方広寺鐘銘を撰する。
- 慶長 19 年 5 月 大仏開眼供養は 8 月 3 日との徳川幕府の決定が下される。
- 慶長 19 年 7 月 21 日 徳川家康が方広寺鐘銘を難詰する。
- 慶長 19 年 7 月 26 日 徳川家康が開眼供養延期を命じる。
- 慶長 19 年 8 月 14 日 京都所司代・板倉勝重が、京都五山の僧侶に対し意見書提出を命じる。
⇒ 僧侶たちは揃って幕府の意見を支持、文英清韓を攻撃した。
- 慶長 19 年 8 月 15 日 幕府が文英清韓の住庵を打ち壊す。

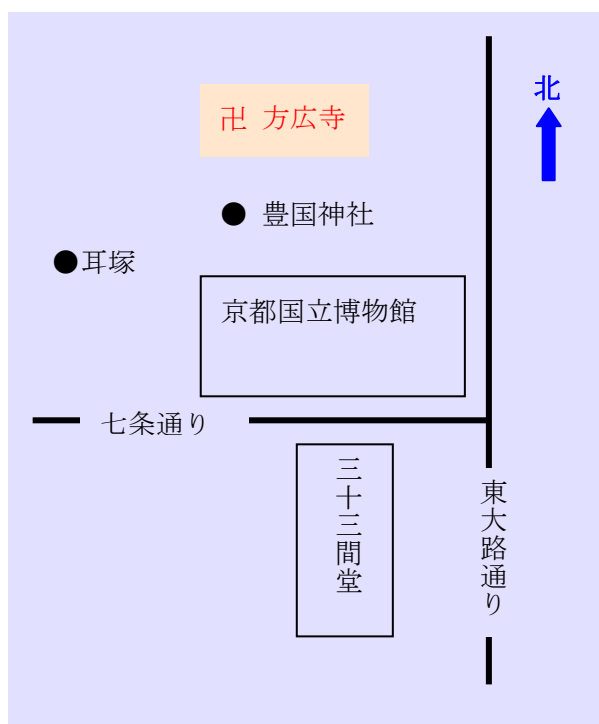
家康(徳川幕府)としては、戦を仕掛ける口実ができるのなら理由は何でも良かったわけです。開眼供養を一旦は裁可しておき、わざわざ万端整った段階で難癖をつけて、大坂方の反発を煽るという悪智恵を働かせたのです。豊臣家の財貨を消耗させる大仏(殿)再建工事には賛成するが、秀吉あるいは豊臣家を寿ぐような開眼供養などは絶対に許さない、というわけですね。この後、大坂冬の陣・夏の陣と推移し、大坂城炎上・豊臣家滅亡へと至ったことは史実の通りです。

^{ぶんえいせいかん}文英清韓(?~1621)

東福寺、後に南禅寺の高僧。慶長17年、片桐且元の依頼で方広寺の鐘銘を撰することになる。慶長19年(1614)7月、鐘銘事件が起き、大坂冬の陣の直接的契機となった。徳川幕府と大坂方の対立の巻き添えを食ったようなものですね。豊臣氏が滅亡した後の元和元年(1615)に捕縛され、京都、次いで駿府に移送され拘禁されました。

方広寺……秀吉が創建した天台宗寺院で、俗に「大仏さん」と呼ばれる。数度の被災で大半が消失したが、鐘楼とこの梵鐘は現存している。豊臣家も徳川家も倒れた今、いわくつきの梵鐘だけが残っています。

当時、家康の怖れていたことは二つです。一つは、豊臣家の無尽蔵とも思われた財力、もう一つは、秀頼の若さ、即ち年齢差です。前者については、事あるごとに理由を付けて散財させる手段を講じることができますが、家康の老いは止められず、51歳の年齢差は如何ともしがたいわけです。かくなる上は、戦を起こして命を奪うのが早道となります。豊臣側から仕掛けられたので征伐するという体裁と口実が、急ぎ必要であったのです。



豊臣側はまんまと家康の術中にはまってしまったわけですが、家康は^{から}搦め手も用意しました。それが言論統制であり、五山の僧侶に求めた意見書提出です。実は、鐘銘事件の起きる前年から僧侶の禄高を決めるための能力査定という名目で、僧侶に対し作文試験を何度も行ないました。家康に睨まれては禄高が減るので、僧侶は幕府におもねる内容を書かざるを得ません。こうして幕府に好都合な意見が出る環境にしてから鐘銘に難癖を付け、意見書提出を求めたわけです。

尚、念のために申しますと、この時に、ただ一人の僧侶のみが文英清韓を弁護しております。その僧侶とは、妙心寺の海山元珠です。相当肝っ玉の太い人物だったのでしょうね。例えば、第二次大戦後の極東裁判におけるパール判事(インド)のような存在であったかも知れません。

この事件は、日本仏教史に残る屈辱でした。時の権力の前に膝まづき、白であるものを黒に、鷲をカラスに仕立てたわけですから。残念ながら、この類いのものは一度きりではありません。近年においても日中戦争から太平洋戦争に至る過程で起きています。当時の仏教界・宗教勢力は戦時挙国体制の下で皇国の兵士を鼓舞し、戦地に赴かせたということがありました。

梵鐘の話題を最後に一つ。梵鐘は通常上端に竜の頭をかたどった「竜頭」と呼ばれる釣手が付いています。竜王・竜神といったものから想像されるように、これは護法の象徴です。また、胴体部分には「乳」と呼ばれる突起が数多くありますが、音響効果を高める働きをしています。

ところで、梵鐘は一回搗くたびに鐘自体が収縮し、やがては響きが悪くなるものだそうです。一説には、その寿命は平均500万回とのことで、名鐘の音色も永遠ではないというわけです。

梵鐘というものは、鳴らしてみないと味わいも分からないのですが、この方広寺の梵鐘だけは今のままそっとしておいた方がいいかも知れない、そのように思う存在です。